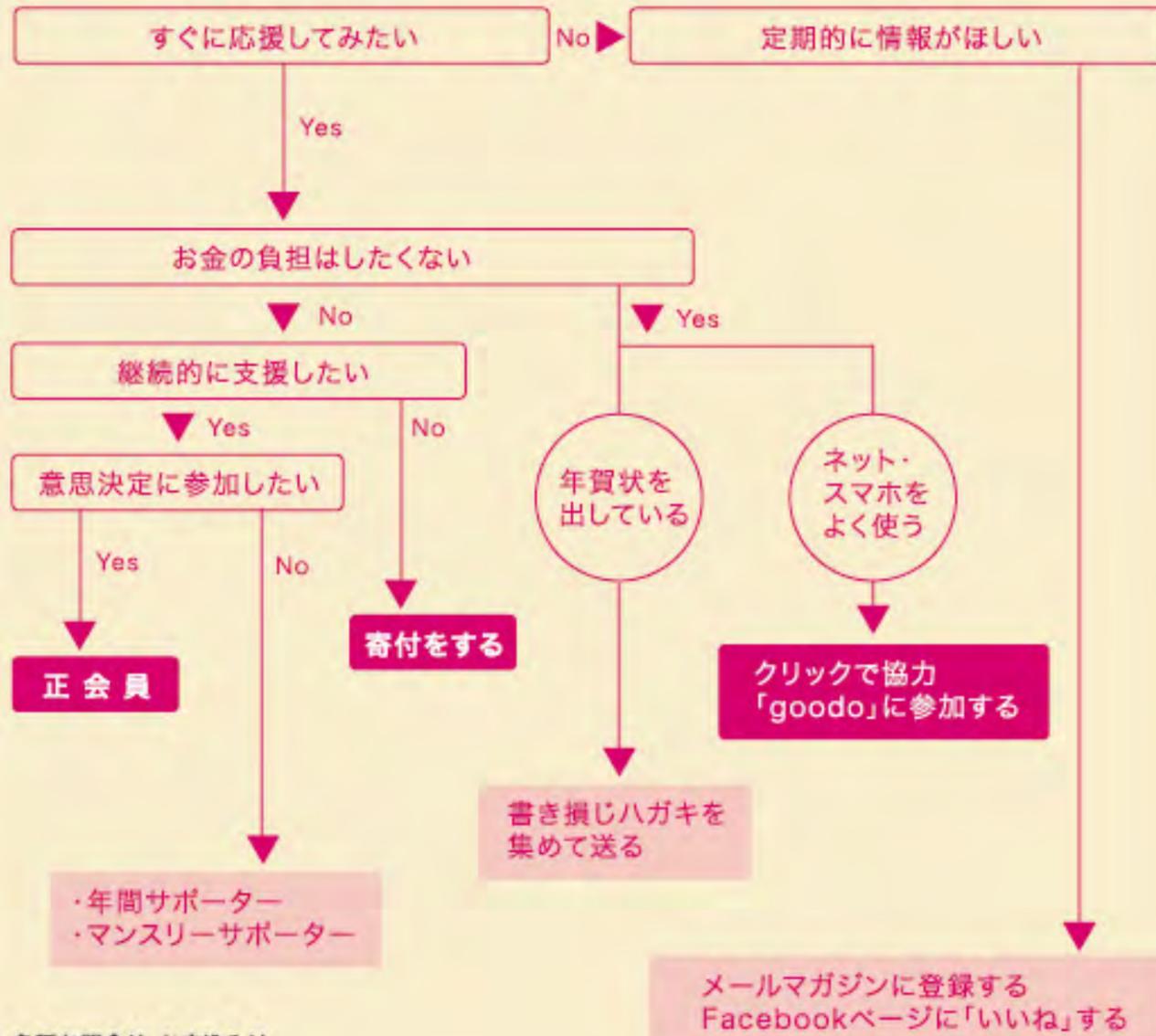




ぜひ、ソムニードに参加してください



各種お問合せ・お申込みは

ソムニード

2013年度ソムニード年次報告書  
 発行者: 特定非営利活動法人ソムニード  
 発行責任者: 代表理事 和田信明・中田豊一  
 発行日: 2014年7月 20日

ソムニード高山本部  
 〒506-0031 岐阜県高山市西之一色町3丁目820-1 森のエコハウス気付  
 TEL: 0577-33-4097 FAX: 0577-36-5471

ソムニード関西事務所  
 〒662-0856 兵庫県西宮市城ヶ廻町2-22 早川総合ビル3F  
 TEL&FAX: 0798-31-7940



認定NPO法人ソムニード  
 2013年度 年次報告書

第21期 2013年4月1日から2014年3月31日  
 創立1993年4月1日



ムラの智恵を掘り起こし、  
 未来の世界へつなげる

- 02 巻頭特集  
 団体名が変わります ムラのミライへ  
 「ムラのミライ」に至る思い  
 「NPO法人ムラのミライ」が目ざすもの
- 06 Project Story & Data インド(農村)
- 09 SOMNEED STAFF インド・ネパール
- 10 Project Story & Data ネパール
- 13 SOMNEED STAFF 日本
- 14 Project Data 飛騨高山
- 15 Project Data インド(都市スラム)
- 16 調査・研修 対話型エンリッチメントの普及と人材育成
- 18 Project Data マネガール
- 19 ひとあしで支え
- 20 団体概要 2013年度振り返り
- 22 編集後記



# 「ムラのミライ」に至る問い

専務理事／国内事業統括：竹内ゆみ子

今年の秋、団体名を「ソムニード」から「ムラのミライ」に変更します。  
団体の名称を変更するに至った背景に、  
日本も、海外が持つ課題と同じような課題を抱え込み、  
私たちの活動内容が国際協力だけでなく、国内に存在する課題への  
アプローチを含んできているということがあります。  
そのため、活動の内容ができるだけ名前に現れるようにしたい。  
という思いがあり、今回の変更に至りました。



私は 10 数年前まで、国内の課題について、見て見ぬ振りをしていました。四万十川の中流にある村で生まれ育ち、村を捨てて都会に出てきた人間だったため、「村がなくなりつつある」ということを薄々感じてはいました。しかし、途上国に住む人々の暮らしの方が日本の生活よりも苦しいものだという思いで国際協力活動をしており、頭の隅には「似たような問題があるな」と感じていましたが、気づかないふりをしていました。

しかし 2000 年の 1 月、インドで開催したスタディ・ツアーが、私の目を国内に向けさせるきっかけとなりました。

訪れたのは、オディシャ州南西部の山奥にある小さな村・ブットシル村です。

私たちはそこで 1990 年代後半に、植林などいくつかのプログラムを実施していました。1999 年には、ソムニード、現地の NGO、ブットシル村の住民の 3 者共同でミニ水力発電プロジェクトを実施しました。住民に必要なだけの電力を供給するための、総電力数 5 キロワットという小さな水力発電所は「小鳥の声が聞こえる水力発電所」と評判になり、村人も「インド独立から 50 年間、将来に思いをはせる余裕は全くなか

ったが、水力発電所のおかげで、将来というものを考えることができるようになった」と喜びを表し、プロジェクトは大成功を収めました。

この頃、私たちの活動は現地の NGO から「村の人々対話しながら行うソムニード方式。今までに前例がない」などとほめられるようになっていて、私は有頂天になりつつありました。そして「これほどの事業を内輪だけのものにするのではなく、日本の支援者の皆様にも見てほしい。国際協力の見本になって欲しい」という思いで、このスタディ・ツアーを企画しました。しかし、このツアーでの出来事が、私を戒めることとなったのです。

日本からの参加者は村の生活や水力発電を感激しながら見て回り、ツアーは順調に進みました。そして、ツアー最後のイベントである、参加者から村長さんへの質問会で、それは起こりました。ある参加者が村長さんに「せっかく電気が点いたのだから、日本の電気製品は要りませんか」と尋ねました。村長さんの答えはこうでした。「電気が点き、村の将来を考えられるようになっただけで十分です。ただ、先進国から来た皆さんに教えてほしいことがあります。私たちは子どもたちに

より良い生活を送って欲しいと思い、町の学校に通わずののだが、子どもたちが村に帰ってこない。帰ってきたとしても、学校で学んだことを活かす仕事がありません。どうすればこの課題を解決できるのだろうか。皆さんに教えてほしい」と聞き返してきたのです。私は「なんてことだろう」と、天から地に落とされた気分になりました。私たちが高山で薄々気が付いていた課題を、インドで苦しい生活を送っている村の人々がすでに考え始めていたのです。参加者の誰も、質問に答えることはできませんでした。私も何と答えていいのかわからず、正直に言うしかない。「高山が抱える問題も、あなたの村が抱えている問題と一緒にです。だから、私たちもあなたたちを助けることなんてできません。これから一緒に解決策を考えていきましょう」と、精一杯答えました。本当に恥ずかしく穴があら入りしたい気持ちでした。

以前の私は、途上国より日本の方が課題は大きく深いと思っていたので、その本質的な質問に衝撃を受けました。まさに地域の課題が国際的な課題となっていくことに気づいたのです。この出来事が、国際協力で夢中になっていた私の目を高山に、地域に向けさせることになりました。地域の人々と話し始める

と、過疎化が進む中でも「地元に住み続けたい」という声のあることがわかってきました。そこでそういう人たちと一緒に活動を始めました。

最初にしたのは、空き家が増えていた地区で、人と人が結びつき、3 世代交流が出来る場づくりをすることでした。この活動は終了しましたが、今でも、まちづくりスポットでの活動に、その考え方を受け継いでいます。

地域で頑張っている人々が支え合い、生活向上を実感できるようにすること。そんな生活を実現することで、海外の人々にも、「こういう生活をすれば、ずっと同じ場所で暮らせますよ」と提示できるようになると考え、高山で頑張っています。逆に、こうした生活モデルを実現できなければ、村長さんの質問に答えることはできないし、村の人々とも対等な関係を築くことができないでしょう。

団体名を「ムラのミライ」という、海外だけでなく国内にも通用する名称にすることで、「私たちは国内の課題にも取り組んでいきますよ」という姿勢を見せ、国際協力としてもインパクトのある活動をやっていきたいと思っています。

# 「NPO法人ムラのミライ」が目ざすもの

代表理事／海外事業統括：和田信明

私たちは、この10年、国際協力とは一体何を指すのかを、「支援」の対象である、いわゆる途上国からの視点と、そして主体である私たち自身を恒常的に問い直すことで、考え、そして活動に反映させてきました。その過程で、揺るぎない考え方となったのは、私たちの活動は、あくまで彼我の共通の課題を解決する試みであり、その当然の帰結として、国内での活動も、途上国での活動と同じ比重を持たせながら行うということでした。それが活動の現場での、独自の方法论とあいまって、私たちを、新しい社会を切り拓く第一線へと立たせてきました。



インド農村にて

その中で、団体を法人化した当時で作成した活動目的と、現在の活動内容が合わない様になってきました。国際協力に対する認識そのものが、当初の認識と違ってしまったので当然のこととも言えますが、団体名変更に伴い、定款に重なる団体の活動目的の部分も変更するという作業を行いました。

これまでの定款では、こう言っていました。

(前文)

この法人の実施する活動は、いわゆる発展途上国の農村等の貧困層、特に貧困ライン以下の層の生活の向上を図り、また、彼らが、国際連合が1966年に採択した国際人権規約に定める諸権利を、世界の他の地域の人々と平等に享受できる状態を実現すること、そして、そのための活動を通して、日本に住む我々の生活を見直すことを目的とする。我々は、この活動を、より良い地球環境と人類社会の確立を目指す活動の一環として位置づける。

(目的)

この法人は、いわゆる発展途上国の農村等の貧困層の生活の自立のための自助努力を支援すること、及び、それらの活動を通して日本に住む我々の生活を見直すことを目的とする。

私たちが活動の中で気がついたことは、「貧困」とは問題そのものではなく、ましてや、解決すべき課題ではないということでした。むしろ、途上国のいわゆる「貧困」は、第一に、いわゆる先進国がもたらした社会、経済的

構造の問題であり、第二に、先進国側から見た視点で、途上国に足りないもの、つまり、あれがない、これがないという状態を指す場合がほとんどであるということでした。

また、「生活の自立のための自助努力を支援する」などと、随分と傲慢な態度を取っていたものだと、今思えば、冷や汗三斗の思いがします。元々その地で何世紀も生きてきた人たちを、どんな根拠があって「自立していない」などと断じていたのでしょうか。これも、見かけの「貧しさ」からの見方でしかあり得ませんでした。

その土地にある資源や知恵に気づくことなく、その土地に暮らす人々を真に信ずることなく、国際協力の分野で一般的だった見方を無批判に援用したに過ぎなかったのが、この改定前の活動目的だったのです。

問われるのは、私たちの暮らし方です

私たちが「途上国の農村の貧困層の生活の自立への自助努力を支援する」などと言うとき、一方で「生活の自立」とは何かという明確なビジョンを持たないとき、漠然と現在私たちがしているような生活スタイルをするようになれば、と彼らに言っていることになります。もしそうでないなら、では一体「生活の自立」で何を指せというのでしょうか。ここで重要になってくるのが、私たちが途上国で活動するとき、そして言うまでもなく国内で活動するとき、自分たちは一体どのような具体的な、目指すべき社会のビジョンを持っているかということです。つまりは、途上国の農村で、都市のスラムで、そして過疎と高齢化が極端に進んだ日本の農村で活動

するときに、私たちは常にそのことを自分たちに問い続けなければいけない、それ無しには、私たちの活動は結局どこにも行き着かない、ということです。

新しい活動目的は、私たちの出発点

意外なようですが、人類はこれまで、自らの生活に基づく社会の将来計画というものを立てたことがありません。そのようなものに基づいて運営されているような錯覚を抱きやすい近代国家においても、たとえばエネルギーの消費において、本当の適正使用量はどのくらいか、ということを一度も計画したことではないのです。

それでも、私たちは知らず知らずのうちにそのようなことを、当然のこととして受け入れています。現在私たちが生きている社会はこのようなものだ、という認識、すなわち人類の必然的発展段階でも何でも無い、という認識からとりあえず出発するとして、私たちは、どのような社会を子どもたちに残そうとするのか、新たな活動目的は、そうした考え方の出発点を述べたものとなっています。

(目的)

この法人は、コミュニティと経済と環境が調和した状態の人間の営みを実現することを目的とする。

そのために、地域コミュニティが資源を維持、活用、循環させる仕組みや暮らし方を、創り出していく。

その方法论を、生活の現場での活動を通して構築し、それを担い実現する人材の育成を行う。

環境・経済・コミュニティのバランス

最初の文では、私たちがどんな社会を目指すかを語っています。コミュニティと経済と環境がバランスの取れた状態で社会が成り立つことを実現しようと言うことです。

環境とは、人間が集団として生き延びるとき、つまり人それぞれの個体が、寿命が尽きるまで日々再生産されていくための資源として位置づけることができます。環境、つまり自然ですね、人間がそこから何らかの糧を得ると言った途端に、その局面では資源となります。その資源を使って、何らかの生産活動(基本的には農業ですね)を行うことが、経済



活動の基礎です。コミュニティとは、その資源を使い、経済活動を行う主体です。その活動を行うための技術なり知識なりが、様々な形を取って集団内に蓄積されていきます。

こういう「ムラ」をつくりたい

近代化以前なら、このような知識を経験知としてコミュニティに蓄積していけば良かったのですが、市場経済の中でコミュニティを維持していくためには、新たに動力としてのエネルギーをどう持続可能な形で供給していくか、ということも考え、そして実践していかなければなりません。そのためにも、自分たちがどのような生活をしたいのか、そのためには、どれだけのエネルギーを必要とするのか、など、地に足の着いた展望と計画が必要となってきます。

幸いにして、小規模水力発電、風力発電など、コミュニティ単位ですでに実践している例が、枚挙にいとまがないほど増えてきています。このように「小さく」産みだし、過剰なところから足りないところへ融通するシステムさえ作り出せば、自然への負荷の限りなく少ないエネルギー供給が可能となるはずですが、このように、2番目の文は、コミュニティがどのような方向を目指し、どのようなシステムを作り出せばいいかを述べています。

担い手を育てることが大切

3番目の文は、以上述べた社会のあり方、方向を目指すには、その担い手が必要であり、養成する必要があることを語っています。村には実に豊かな資源が存在し、当たり前のことながら、それだからこそ、村を営む、

代々その豊かさを活かし、利用し、生活を営んできました。しかし、市場経済に取り囲まれた新たな文脈で、その豊かさを持続的に利用していくのは非常に難しく、それができなければ、やがて村は崩壊していきます。自分たちの持つ資源を、新たな文脈で利用できる人材の育成が必要であるのは、そのためです。

実は、この部分でこそ、私たち独自の方法论は最も力を発揮するのかもしれない。なぜなら、私たちの研修を受けた村人などが、すでに研修の実施者として、知識、技術を広めているからです。

私たちが目指すのは、以前有った「旧き良き村」への回帰ではなく、なし崩しの現状肯定でもない、新しい「ムラ」の創造です。敢えて「ムラ」と表記するのは、行政村としての「村」と区別し、また、世界中の様々な形態で存在する「ムラ」を包含する意味も有ります。

また、都市においても、地域のコミュニティを新たに創造する、そしてそれがお互いにつながっていく、そのような社会の単位としての意味も含めています。一言で言えば、これからの社会のあり方を示唆する言葉、そして私たちの活動の、「場」を表す言葉でもあります。

これからの、ソムニード改め「ムラのミライ」にご期待ください。



# 2013年。オラたち、農業のやり方変えました！

日本のように畝を作り区画を作って作物を作る習慣のなかった村では、1年の内、2〜3カ月、よくて半年しか作物の栽培ができませんでした。そこで、より効果的に農地を使い、多品目多種類の作物が食べられるように、土づくり、水の使い方、農地デザインなどの研修を、ソムニードから受けてきた47世帯の村人たち。彼らは「モラル農家」として、今までとは少し違ったスタイルで、農業を行いました。



## ブータラグダ村といえば、身体に優しい農作物

47世帯のモラル農家たちは、農作業シーズンが始まる前に、数か月もウンウン唸りながら、ここにこの作物を植えて、収穫が終わったら次は何を植えて、と農地デザインを描き、計画を立てました。

この農地デザインを基に、堆肥やバイオ農薬を使って栽培した2013年。「今年は市場で野菜を買う量が減った。畑から毎日のように何かを収穫してメシを作った」という声がたくさん聞かれました。

野菜はほとんどが自家消費ですが、穀類は現金収入のために仲買人に売ります。いつもは安く買いたたかれるところを、「今年は、色も大きさも全然違う。今までのように安く買われたらたまったもんじゃない」と、「オラたちの村で採れたレッド・グラムは、1キロ30ルピーで売ります」と、自分たちで価格設定しました。

同様に、「これからオラたちの村の農作物は、オラたちの

村で採取した種で、栽培していく」と村の中に種子銀行(シード・バンク)を立ち上げ、そこが一括して種を取り扱えるように、動き出しました。

2010年に始動した流域管理委員会の活動の一部となるシード・バンク。山から農地まで、自分たちで管理していけるように、一步一步着実に、前に進んでいます。



## 村から誕生した指導員たち

2007年以来、活動を共にしてきた村人たちの中から生まれた14人の指導員たち。「周りの村でも、オラたちの活動を広めよう」と、近隣の村々へ研修を行いました。「流域とは何か」「自分たちの山の植物や土、川はどんな状態なんだろう」「山をこれ以上荒らさないためには、何が必要なだろう」と、約1年ぶっ通しで、10か村の村人たちが研修を受けました。

そして、山での土壌流出を防ぐ石垣と、鉄砲水を抑える堰堤を、計画を作って予算を立てて、作業を分担して、作り上げました。指導員の中で、**唯一の女性バドマ**。自分の担当エリア以外の村で研修を行うことになった時、最初は、名前すらも呼んでくれなかった村人たちでしたが、バドマが根気強く研修を行い、村人の意見を引き出していき、計画を立てられるようになった時、村人たちはバドマの事を、敬意を込めて「マダム」と呼ぶようになりました。

こうした10か村の様子を見聞している別の村から、「オラたちも参加したい。研修を受けさせてくれ」と、次々とオファーが来て、嬉しい悲鳴を上げている指導員たちです。



## 植物、ウシ、ミミズ、コメ野菜、そしてオラたち。みんな繋がってる。



長年、化学肥料や農薬を使い続けて、疲弊していく土壌。微生物による土壌改良をしていくために、ミミズを使った堆肥作りに取り組みました。コンテナに葉っぱを敷いて、牛糞を置き、ミミズを混ぜて、水で溶いた牛糞を撒く。発酵させると、45日目にはサラサラとした堆肥ができあがります。これを田畑に撒くことで、土の中でミミズの卵が孵り、土壌改良に一役買ってくれるのです。

同じスリカラム泉の「堆肥作り名人」の元へ過ったり自分たちの村へ来てもらったりして、村人たちはノウハウを学びました。

町での就職を諦めきれない村の青年は、「ボク、ミミズ触れない」と、くねくね動くミミズを見て及び腰に。

「オレが家族を食わしていくんだ」と研修に人一倍取り組む別の青年は、作業がし易いように堆肥作り小屋を改良し、また、「農薬も有機物で」と、葉っぱと牛の尿から醸成した「バイオ農薬」を使い始め、じわじわと他の村人へも広がります。

堆肥作りに必要な牛糞や牛の尿は、飼っている牛が与えてくれます。牛が食べるエサは、畑や周りの山にある植物から採ってきます。**山から農地まで、無駄なく必要な資源を使い、そしてまた作りだしていくのです。**

## サツマイモ栽培から分かること

この地方のサツマイモは、日本で主流の「金時」よりも甘みの少ない、**白いサツマイモ**が主流です。スパイスを使ってさっと煮て、ご飯と一緒に食べる、インドでは珍しい「甘いカレー」です。サツマイモ栽培は長年続けられていますが、2013年は少し工夫をした二人のモデル農家がありました。テンナ・モハンは、小高い畝を作り、イモが大きく育てられる場所を確保しました。ラメーシュは、従来通り平らな所で植えました。

テンナ・モハンの畑から採れたサツマイモは、他の倍ほどの大きさで、収穫量もアップ。ラメーシュの所はあまり大きくなりませんでした。狙いは「土留め」だったのです。少し傾斜があった畝のキッチン・ガーデンでは、厚い土が必要なショウガを栽培しましたが、サツマイモのツルが地面を這い延びることで、雨で土が流れていくのを止めていたのです。「土壌が流れないよう、山に石垣を作って植林をしているように、畑やキッチン・ガーデンでも、土が流れださないようにしないと」。モデル農家たちは、それぞれの場所にあった方法で、土を作り守りながら、作物を育てることを学んでいます。



## ソンプルさんの挑戦

田んぼを担当するモデル農家となったのは、2013年3月頃。群にも豆や花、瓜系の野菜を育てようとしていた他のモデル農家たちとは反対に、「ワシはコメ以外何もせん」と、コメ作りカイゼンだけに集中する、と言った**ソンプルさん**。

従来の田植えは、種籾を撒いて21日目の苗を使い、4・5本の株を一本まとめて、株と株の間も隙間なく植えていく方法。ソンプルさんも、そうしていました。

けれど、モデル農家として実践するのはSRI農法(幼苗一本植え高収量稲作法)。12日目の若い苗を使い、その名の通り1本ずつ間隔を置いて植え、水量も従来の3分の1程におさえます。

「1本か2本の若いナヨナヨした苗を、25センチ間隔で植えたがる。地面にヘナ〜と横たわるとる訳よ。あゝダメだ、と思ったさ。周りの村の連中からも、田んぼに出るたびに笑われたしな。

そしたら1週間か10日ほど経つと、ピンと立って。あの時は、心の底からホッとしたよ。後はグングン伸びて、11月には周りの田んぼよりも、ワシの稲穂はたくさん実をつけていたわい」

今までの8分の1の量の種もみで、2倍の収穫ができたソンプルさん。

1月に収穫・脱穀が終わると、すぐに二期作に入りました。3月、周りの田んぼは雑草だらけなのに、ソンプルさんの田んぼはほとんど雑草が生えていません。ソンプルさん曰く「化学肥料を撒くと、雑草にも栄養がいくから、雑草もよく生える。だけどワシの所は使っていないから、雑草もあまり生えないし雑草抜き作業もいらぬ。去年SRIをやった、学んだことさ」

幼苗一本植え高収量稲作法



できあがった堆肥。植林なども含めた様々な土壌改良により、これまでのようにやせた土地に化学肥料を使うような事をしなくとも、無農薬でおいしい野菜を作ることができるようになった。



堆肥を作るモデル農家の男性たち、他にも土壌流出をふせぐ対策や、野菜の栽培計画などで確実に収穫量を増やすことができた。

INDIA

### どこで

インド アーンドラ・プラデシュ州 スリカクラム県 16 か村

### だれが/だれと

上記の村人たち



### なぜ

木々が減り土壌が流れ出し、荒廃していく森林と、現金収入のために都市へ出稼ぎに行く村人。「出稼ぎに行くことなく、孫子の代までもここで暮らしていきたい」という村人たちの強い思いと共に、2007 年から「流域」という単位で、村・周辺の山々・農地を総合的に捉え、自然資源を利用・管理していくための考え方やスキルを村人たちに伝えてきています。

### これから

田んぼや畑、キッチン・ガーデンで引き続き「モデル農家」の実践をします。木・土・水から家畜や魚に至るまで、流域内の資源を活用・再生・維持していく循環型の農業と暮らしを実現。普及します。

### 2013ハイライト

2 か村 47 世帯のモデル農家の中から「栽培計画を考えて、ミミズや堆肥を敷いて、土が流れないように工夫したら、今までは 1 年の内 2・3 か月しか作物が作れなかった畑で、年に 10 か月も、たくさんの種類の作物を作れるようになった」といった村人が、続出しました。さらに、無農薬の作物を、仲買人に買い叩かれることなく適正価格で売れるよう、村人たちが動き出しました。村人 14 人が指導員として、近隣の 10 か村に研修し、自分たちで考えて計画を立て、石垣など必要な対策を実行できるようになりました。

## SOMNEED STAFF

INDIA NEPAL



インド・ビジャカバトナム

- 1.M.Rama: Assistant Care Taker
- 2.S.K.Basha: Driver
- 3.B.S.K.Kishore: Assistant Clerk
- 4.Mandapati Rama Raju: Managing Trustee
- 5.Mudunuru Rama Raju: Project Officer
- 6.S.Surya Prakash Reddy: Chief Accountant
- 7.S.Narayana: Driver
- 8.P.Ratna: Field Staff

- 1.B. Thulasamma: Assistant care taker
- 2.K. Chinnammalu: Assistant care taker
- 3.L. Kamakshi: Assistant care taker
- 4.前川香子: 事務局次長/海外事業部チーフ
- 5.實方博章: 海外事業コーディネーター
- 6.P. Rama Rao: Watchman
- 7.M.Surya Narayana: Assistant Project Officer
- 8.Bhiravi Misro: Driver, Field Officer



インド・バタバトナム

- 1.Binod Chauhan: Project Officer
- 2.和田信明: 代表理事/海外事業部長
- 3.Maneek Rai: Junior Accountant Officer
- 4.Priti Rana: Account Cum Administration Officer
- 5.Thuli Lama: Assistant Account Cum Administration Officer
- 6.池崎翔子: 海外事業コーディネーター
- 7.Jeevan Paudel: Office Driver
- 8.Ujjwal Thapa: Project Officer
- 9.Devendra Basnyat: Project Officer
- 10.Suman Basnyat: Assistant Project Officer



ネパール

# 「泳げる川」を取り戻したい!

ネパールの子どもたちが、人びとが、動き出す。

世界遺産にも指定された古都カトマンズに今、異変が起こっています。カトマンズ盆地を横切って流れるバグマティ川は、生活排水が流れ込み、ゴミが投棄される、悪臭放つドブ川となってしまうのです。解決の糸口は、いったいどこにあるのでしょうか。

## 私たちの水は、暮らしはどうなるの?

ネパールの首都・カトマンズの生活水の主な水源になってきたバグマティ川。人々はこの川から、飲み水をはじめ、炊事・水浴び・洗濯など生活に必要な水を得てきました。さらにバグマティ川は、ヒンドゥ教徒にとって「聖なる川」。人々はバグマティ川で沐浴し、亡くなった後の遺灰はバグマティ川に流すのです。

そんな大切な川が今、死にかけています。

カトマンズには農村部から急激に人口が流入。カトマンズ市民は、川の1キロ先まで漂う悪臭に悩まされ、水を買う余裕のない人々は、汚染の進んだ水を使用せざるを得ず、健康被害も懸念されています。

## 子どもたちから、地域へ

私たちは、地域の未来を背負う子どもたちに注目しました。カトマンズには、民族的・文化的な背景の異なる人々が、互いのことをよく知らず、暮らしています。でも学校では、いろいろな民族・文化の子どもたちが一緒に勉強しています。彼らが「みんなでアクションを起こして、家の周りのゴミや、汚いバグマティ川を変えていきたい!」と考え、行動し始めることが、やがては地域全体を動かしていく…そう考えました。

## バグマティ川の健康診断

2012年末から、まず学校の先生たちに研修をおこない、「川の課外授業」を作り上げました。バグマティ川の上流から下流まで、自分たちの足で歩き、観察し、耳をすませ、(水質を)測る、体験型・参加型の授業です。「何が原因で汚れているのか?」「どうしたら水質をきれいに、ゴミを少なくすることができるのか?」子どもたちや保護者がバグマティ川を検診し、診断結果をまとめ、そして処方箋を考える過程を、学校の先生たちが導いていく…それが「川の課外授業」です。

川の現状を目の当たりにしたことは、先生・子ども・保護者に強烈なインパクトを与えました。ある学校では、学校で出るゴミを分別するようになり、それが生徒たちの家庭にまで広がり始めています。

## アクションを加速させる

子どもたちの、地域の人々のアクションを引き出していくため、2014年度は、さらに多くの学校で、この授業を実施していきます。また、この授業を実施するためのテキスト(副読本)を作成・配布する予定です。

そして、「何とかしたい!」と考え始めた人びとの行動を加速させるため、地域単位で生活排水を処理できる「分散型排水処理施設」を建設。地域による排水処理のモデルづくりに取り組みます。





課外授業に参加した子どもたちは、「これほど自由に移動し学ぶという機会は初めて。一緒に参加してくれた両親、先生、クラスメートとバグマティ川に行ったことで、より環境について感じ、身近な気持ちになりました。」といった感想が聞かれました。

### どこで

■ネパール カトマンズ 郡北部 ジョルパティ地区・ポータナート地区・ゴカルナ地区

### だれが/だれと

上記地区内の小中学校の生徒たち、環境教育担当教員、生徒たちの保護者を含む地域住民



### なぜ

ネパールの首都カトマンズを流れるバグマティ川は、近年の急激な人口増加に伴い、大量のごみ投棄や排水の垂れ流しにより極端に汚染されています。行政だけに頼っている解決できない問題に目を向け、失われたバグマティ川の再生のために、カトマンズの住民たち自ら「何をすべきか」を考え、地元の環境問題に取り組むためのサポートをしてきました。

### 2013 ハイライト

2012年12月から開始した教師向け研修には、のべ401名が参加しました。教師たちはバグマティ川での課外授業を実施。9校からの参加者581名(生徒と保護者と教員)がバグマティ川の上流から下流を訪れ、川の現状を知るための観察を行いました。その後、地元についてよく知るためのグリーンマップ作成研修を、4校210名(生徒と保護者と教員)が実施しました。また2013年2月からは、地域住民が管理運営できる分散型排水処理施設をつくるための準備をスタートしました。

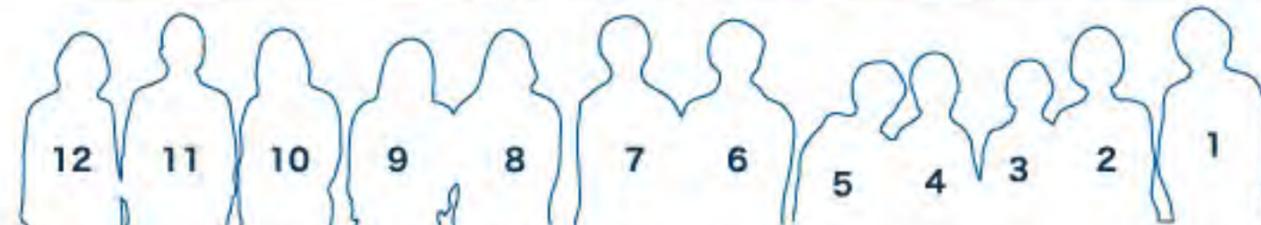
### これから

地域住民が一丸となって環境保全活動をおこなう状態をめざします。2014年度は引き続き研修を実施すると共に、環境教育の副読本を作る取り組みや、生活排水・家庭ゴミのコントロールなど日常的な環境保全活動を学ぶ研修も実施予定です。さらに分散型排水処理施設の建設に向けて、地域住民に施設建設の詳細(施設の仕組み、コスト、材料など)を共有し、汚染のメカニズム・日常的なゴミ処理方法・施設の保全方法・水質検査の方法等に関する研修を行います。

## SOMNEED STAFF

■高山本部スタッフ

■関西事務所スタッフ



- 1 光本 昭子：総務、会計
- 2 大塚 由美子：事務局長
- 3 大西 廣子：会計、労務
- 4 竹内 ゆみ子：国内事業部長  
(特活)まちづくりスポット代表理事
- 5 ワタ アスカ：コミュニケーション
- 6 小柳津 仁：コミュニケーション  
(特活)まちづくりスポット
- 7 田邊 友也：事務局長  
(特活)まちづくりスポット
- 8 谷前 久美子：経営管理マネージャー  
(特活)まちづくりスポット
- 9 掛札 文代：受付事務  
(特活)まちづくりスポット
- 10 田中十紀恵：コミュニケーション
- 11 中田 豊一：代表理事
- 12 宮下 和佳：事務局長代行



Project Data

NEPAL



多世代との交流イベント



買い物ツアーを楽しむ参加者



みんなで音楽を楽しむ会

### どこで

■岐阜県高山市



### だれが/だれと

まちスポが中間的な存在として市民と企業、そして行政とのコーディネートやサポートを行っています。

### なぜ

地域の中で何かしたいと思っていながら一歩踏み出せない人々が多いためボランティアグループやNPO法人の活動発表の場をまちスポが提供し、広く社会に市民活動の意義を伝える場となっています。様々な地域課題に取り組み始めた市民活動を応援することが地域活性化につながるの考えからです。



ワールドバーに参加した地域の若者

### 2013ハイライト

企業とNPOが協働で立ち上げた中間支援組織であるまちスポの活動が認められ、大和リース(株)とソムニードが、第10回パートナーシップ大賞優秀賞を受賞しました。国内事業の中心的な活動になっています。

### これから

商業スペースでのNPO活動の可能性とネットワーク化や、異業種の連携を通じた町おこしをさぐっていきます。男性や中高齢者の活動への参加促進が課題です。



VVKの女性たちが暮らすスラム地



女性たちが計画から準備、運営まで取り仕切って催されるVVK総会の様子



女性リーダーのひとりがかつて、ソムニードのスタッフにこのような言葉をくれました。「この事業は、今までの事業と違う。私たちが物乞いのように何かをもらう事業ではなく、責任を持って事業をまかされるのだ」

### どこで

■インド アーンドラ・プラデシュ州 ビジャカバトナム市内

### だれが/だれと

ビジャカバトナム市及び郊外のスラム地域に暮らす女性たちが設立したマイクロファイナンス協同組合 Visakha Vanitha Kranthi (VVK)

### なぜ

スラム女性たちは「貧困層」向け援助の「お客さん」と化していました。そこでソムニードは、彼女たちの貯金と出資金だけを元手に、彼女たち自身がルールを決めて資金を回していく「困った時に、必要なだけ・低利子で借りられる」信用金庫の設立と運営をサポートしてきました。

### 2013ハイライト

2004年からソムニードの研修で鍛えられてきたオバチャンたち。98人が約12,000円の元手で始めた信用金庫は、2014年3月の時点で、年間貸付高3178万円・会員数3160人となりました。1000人の会員に行ったVVKの融資サービスや運営に関する調査では、ビジネス目的で融資を受ける会員よりも日々困った時に家計の足しになるよう融資を受けている会員の方が4倍多く、ニーズに合った運営が継続されていることが確認されました。

### これから

ソムニードの支援は2013年度までで終了します。めでたく、支援を「卒業」です。2014年度は、ソムニード・インドアがオバチャンたちから「コンサルタント」として委託を受け、必要な指導を行っています。

INDIA

Project Data

INDIA

## 対話型ファシリテーションの普及と人材育成

2013年度は講座や研修を実施しながら、  
講座・セミナー企画全体のリニューアルに向け、  
調査をおこないました

### 講座・研修

#### 講師・アドバイザー・専門家の派遣

大学や一般向けの講座でお話ししたり、他団体のプロジェクト・組織運営のお悩み解決に伺ったりと、計12件にスタッフ・理事を派遣しました。

#### 対話型ファシリテーション講座

ソムニードが活動の現場で培ってきた、シンプルな対話を通して当事者主体の学びと気づき、行動変化を促す対話型ファシリテーション手法を伝える講座です。

2013年度は基礎編を5回実施し、のべ51人が参加しました。参加者の内訳は、NGO/NPOスタッフをはじめ、会社員や教員、学生などさまざま。新たに基礎編に加えて、地域づくりの現場を訪問しインタビューをおこなうことでスキルアップをめざす、中級フィールド研修を2回実施しました。

#### インド・コミュニティファシリテーター研修

インドのプロジェクト現場でファシリテーション手法を学び、フィールドでの実践を繰り返して地域づくり・国際協力に必要な視点やスキルを学ぶ研修です。2013年度は12月と2月に開催し、のべ11人が参加しました。



2014年度、セミナーや講座・研修を大きく拡充。  
「今の自分にピッタリ」のスキルアップメニューをお届けします。

2013年度に実施した調査を踏まえて、セミナーや講座・研修のラインナップを多彩に広げると共に、他団体のプロジェクトへのアドバイザー・専門家派遣も積極的に実施していきます。また外務省 NGO 相談員として、国際協力やボランティア、NGO/NPO の組織運営やプロジェクト運営に関する質問や相談にもお答えします。これらの多様なメニューを通して、これから地域づくりや国際協力に関わろうという層、既に活動を始めている層、プロとして実践経験を積んできている層など様々な方に合ったスキルアップの機会を提供します。

セミナー・講座の予定は…

ソムニード ファシリテーション で

地域に住む人々が主体となる  
地域づくりを実現するためには？  
本当の課題を見つけ、  
地に足のついた活動をするためには？  
ソムニードが活動の現場で培ってきた  
経験と手法を伝えています。





Intermondes事務所前で。左から：和田、Mamadou、Cheikh、Melanie、中田。Intermondesは、西アフリカでもっとも歴史があり、定評があるNGOと言われるEnda-Grafから派生してできたセネガルの現地NGO。

セネガルの首都ダカールからンブル市、タンバクンダ市などの近郊の村を巡り、現地の話聞いて回る中田・和田代表。

### どこで

■セネガル共和国  
ティエス州グニエヌ県  
バガナ村及びその周辺。



### だれが/だれと

上記の農村に暮らす人々。

### なぜ

若者たちが、都会や海外に出稼ぎに出なくても、豊かに暮らして行けるような農村社会を実現したいというのが、パートナーとなるNGO「Intermondes」スタッフの切実な願いです。

そこで、地域の農民たちの農業技術および営農の能力を強化することで、乾燥の進む農村地帯において、水資源や土地といった資源を、持続的かつ効率的に管理・運営する農村開発プロジェクトを新たにスタートします。

### 2013ハイライト

2年にわたって共同代表の和田・中田がセネガルへ渡航し、案件形成調査を実施しました。

### これから

2015年度早々からプロジェクトを開始できるよう、セネガル主要スタッフ2名をインドに招聘し、1ヶ月間の研修を実施します。また、2014年度中にプロジェクト資金を調達するため、寄付キャンペーンや助成金申請を行います。

みなさまとのパートナーシップに心から感謝申し上げます。

正会員 **65人725,000円**

マンスリーサポーター **78人849,000円**

年間サポーター **77人708,000円**

ご寄付 **219人2,187,429円** 寄付や会費で



(うち書き損じハガキや商品券のご提供) **(250,192円)**

クリックによる支援「goodo」 **49,041円**



企業や団体で(個不同)

- 法人会員** 健栄住宅商事(株) 笠原木材(株)  
**ご寄付** (株)池村商会 (公財)大阪国際交流センター (株)駿河屋 魚一  
 (株)高山ビジネスマシン 高山ロータリークラブ (株)ビデオエイベックス  
 ラ・サール学園  
**協働** (特活)AMネット (特活)泉京・垂井 大和リース(株)  
 (特活)水政策研究所  
**助成金** 外務省(日本NGO連携無償資金協力) (公財)トヨタ財団  
**補助金** 外務省(NGO事業補助金)  
**事業受託** 高山市(集落支援員) JICA(草の根技術協力事業パートナー型)  
 外務省(NGO相談員)

### 様々な媒体で

Facebook記事への「いいね!」 **6,884人**

メールマガジン配信先 **1,731名**

書籍「途上国の人々との話し方」購入 **318冊**

### こんな協働も



プロボノによるマーケティング基礎調査:

(特活)サービスグラントxPanasonic(株) チームメンバー **6人**

チャリティヨガクラス:ギャラリーカフェぐるり のべ **9人**



# 団体概要

2014年11月1日(予定)より団体名が変わります！

団体正式名称

特定非営利活動法人 **ソムニード**



特定非営利活動法人 **ムラのミライ**

設立:1993年4月1日

本部所在地:〒506-0032 岐阜県高山市千島町900-1 飛騨・世界生活文化センター内

活動内容:地域コミュニティ開発プロジェクトの実施(海外、日本)  
研修・講座の実施、専門家派遣・講師派遣・アドバイザー派遣

代表理事:和田 信明 (特活)ソムニード 海外事業部長  
代表理事:中田 豊一 参加型開発研究所 所長  
副代表理事:山田 貴敏 笠原木材(株) 代表取締役社長  
専務理事:竹内 ゆみ子 (特活)ソムニード 国内事業部長  
常務理事:大塚 由美子 (特活)ソムニード 事務局長

理事:浅野 宣之 大阪大谷大学 人間社会学部 教授  
理事:直井 晃一 斐太石油(株) 取締役総務部長  
理事:長畑 誠 一般社団法人あいあいネット 代表理事、  
明治大学大学院ガバナンス研究科 専任教授  
理事:和仁 一博 (有)まんま農場 取締役  
理事:小森 忠良 (株)十六総合研究所 主席研究員

監事:渡辺 成洋 税理士  
監事:高野 元樹 (特活)ボラみみより情報局 代表

職員数

本部事務所:有給非常勤職員 5名  
インド事務所:有給常勤職員 2名  
ネパール事務所:有給常勤職員 2名  
関西事務所:有給常勤職員 2名  
有給非常勤職員 1名



## 設立20周年記念企画 「地域コミュニティがつくる、水の未来」

8月9日～18日の10日間、インド、ネパール、国内スタッフが大集合。「地域コミュニティと水資源」をテーマに、関ヶ原町、高山市、西宮市、大阪市、名古屋市を訪問しました。日本での水資源管理の事例を学び、ソムニードの活動をふりかえるのが目的です。

揖斐川流域では伝統的・近代的な2つの水資源管理の方法を見学しました。高山、関西でのワークショップを経て、大阪と名古屋でシンポジウム「地域コミュニティがつくる、水の未来」を開催。マクロな視点での世界の水事情と、ミクロな視点での水資源管理の取り組みを紹介しました。

資源は無限ではないからこそ、地域コミュニティ単位での資源管理の実践を積み重ね、未来を描いていくさまざまな場面でそうしたソムニードの活動のあり方をふりかえることのできたツアーでした。



### 受賞

大和リース(株)とソムニードの協働事業「市民活動を応援する場と組織づくり事業」が、「第10回日本パートナーシップ大賞」優秀賞を受賞しました。



### 新しいオフィスに移りました



本部事務所(高山)・関西事務所(西宮)  
どちらも新しいオフィスに移りました。

お気軽にお立ち寄りください。

### メディア掲載一覧

- 8月19日: 岐阜新聞  
「ソムニード設立20周年シンポ 水資源テーマに意見交換」
- 8月19日: 中日新聞  
「世界の水環境どう守る?名古屋でシンポ インドでの活動報告」
- 8月22日: 中日新聞  
「ネパールの環境保全にNGO現地スタッフ岐阜視察、市民と交流」
- 8月23日: 岐阜新聞  
「ネパール、長良川を手本に河川浄化に取り組む男性が来岐」
- 9月3日: 大垣ケーブルテレビ  
ニュースLink  
「国際水協力年にちなみ、海外からマンボ見学」

### 開催イベント一覧

- 活動報告プレゼン大会  
5/30(木) 神戸市 6/2(日) 高山市
- 国際水協力年セミナー  
7/24(水) 大阪市 7/31(水) 大阪市
- 国際水協力年/ソムニード設立20周年記念シンポジウム  
「地域コミュニティがつくる、水の未来」  
8/17(土) 大阪市 8/18(日) 名古屋市
- 関西事務所オープンオフィス  
9/27(金) 西宮市
- トークイベント  
「海外駐在スタッフ座談会～私がインド・ネパールで働くワケ～」  
1/15(水) 西宮市
- ミニパネル展「インド植林支援へのご協力ありがとうございました」  
1月 高山市
- ソムニード20周年記念 長谷川友子写真展  
ーインド、ソムニードの活動地 1995～2002ー  
1/22(水)～2/7(金) 高山市
- 車座トーク  
「壁を飛びこえよう! グローバルに、ローカルに」  
1/23(木) 高山市



科目	金額	金額	金額
<b>I 経常収益</b>			
1. 受取会費			
正会費	725,000	725,000	
2. 受取寄付金			
受取寄付金(個人)	3,749,429		
受取寄付金(企業・団体)	14,356,139	18,105,568	
3. 受取助成金等			
受取民間補助金	2,700,000		
受取国庫補助金	4,521,724	7,221,724	
4. 事業収益			
自主事業収益	7,510,115		
JICA受託事業収益	48,975,176		
政府・自治体受託事業収益	6,617,708		
企業等受託事業収益	0	63,102,999	
5. その他収益			
雑収入	77,102		
受取利息	1,008	78,110	
経常収益計			89,233,401
<b>II 経常費用</b>			
1. 事業費			
(1) 人件費			
給与手当	28,631,061		
法定福利費	4,275,468		
人件費計	32,906,529		
(2) その他経費			
期首棚卸高	918,790		
減価償却	2,708,155		
通信費	619,860		
消耗品費	892,985		
旅費交通費	8,383,593		
印刷製本費	584,832		
賃借料	868,489		
海外事業費	17,162,563		
海外事業共通費	4,454,000		
研修費	650,623		
支払手数料	713,651		
保険料	691,701		
租税公課	1,104,849		
水道光熱費	102,068		
広報費	28,951		
語会費	70,701		
新聞図書費	51,941		
福利厚生費	68,052		
会議費	61,336		
雑費	106		
賃借料	357,060		
支払利息	804		
寄付金支出	17,677		
減価償却費	36,293		
期末棚卸高	△654,690		
その他経費計	39,894,390		
事業費計		72,800,919	
2. 管理費			
(1) 人件費			
給与手当	8,734,675		
法定福利費	1,771,870		
人件費計	10,506,545		
(2) その他経費			
商會会	180,474		
通信費	198,576		
消耗品費	138,497		
旅費交通費	874,377		
印刷製本費	234,006		
賃借料	325,795		
研修費	101,377		
支払手数料	101,068		
保険料	5,969		
租税公課	467,051		
水道光熱費	38,601		
広報費	11,999		
語会費	29,299		
新聞図書費	31,528		
福利厚生費	28,201		
会議費	18,976		
雑費	44		
官廳費	128,785		
支払利息	332		
寄付金支出	7,323		
減価償却費	15,043		
その他経費計	2,917,321		
管理費計		13,423,866	
経常費用計			86,224,785
冬季正味財産増減額			3,008,616
前期繰越正味財産額			△1,122,536
次期繰越正味財産額			1,886,080

■2013年度決算概要

<収入>

・会費及び寄付：資金調達のためのデータベース環境整備を進めたものの、依然として短期的運転資金が不足しています。受取会費、寄付金とも予算目標に及びませんでした。(指定寄付以外の会費・寄付 前期比15%減)  
 ・受取助成金等：西アフリカ調査に対して、新たに外務省補助金が採択されました(195万円)。また、外務省 NGO 連携無償資金協力制度の補助金が採択され、2014年2月より事業が開始したため、収入の一部を2013年度分(257万円)として計上しました。  
 ・事業収益：海外への専門家派遣が採択され(308万円)、寄付金などの減収をカバーしました。JICA・政府・自治体からの受託は概ね予算通りでした。

<支出>

・事業費：①海外事業 受託事業は概ね予算通り。セネガル、タミルナドゥ調査に関しては、補助金以外の部分を自己資金で支出しました(48万円)。②国内事業：集落支援員、地域中間支援(まちスポ支援)に関しては、概ね予算通り。③研修事業：国内外での研修・講座に力を入れ、また書籍販売も順調で、事業損益は112万円の黒字でした。  
 ・管理費：高山本部、関西事務所の移転があり、そのための費用を支出しました(100万円)。

■2014年度に向けて

・団体名の変更を契機として、さらに多くの方に入会および寄付金としての活動参加・支援をしていただけるよう努力します。  
 また、より具体的な活動をご理解いただけるよう、プロジェクトごとの寄付・協賛を募っていきます。それによって、財政基盤の改善と活動の継続性を高めていきます。  
 ・社会貢献と相続税対策としての遺産寄付に関して、情報提供を行っていきます。  
 ・専門家、アドバイザー派遣を積極的に行うことで、活動を通して培った経験・スキルを収益につなげます。



科目	金額	金額	金額
<b>I 資産の部</b>			
1. 流動資産			
①現金	5,451,182		
②未収金	2,787,704		
③権利金	654,690		
④前払費用	10,920,770		
⑤預り金	44,837		
⑥戻り金	461,313		
流動資産合計		20,320,496	
2. 固定資産			
(1)有形固定資産			
什器備品	175,438		
有形固定資産計	175,438		
(2)その他の資産			
預り金	460,000		
その他の資産計	460,000		
固定資産合計		635,438	
資産合計			20,955,934
<b>II 負債の部</b>			
1. 流動負債			
(1)未払金	5,414,802		
(2)前受金	12,511,991		
(3)未払消費税	687,300		
(4)未払法人税等	72,000		
(5)預り金	383,761		
流動負債合計		19,069,854	
負債合計		19,069,854	
<b>III 正味財産の部</b>			
前期繰越正味財産		△1,122,536	
当期正味財産増減額		3,008,616	
正味財産合計		1,886,080	
負債及び正味財産合計			20,955,934

財務諸表の注記

①重要な会計方針  
 財務諸表の作成は、NPO法人会計基準(2010年7月20日 2011年11月20日一部改正 NPO法人会計基準協議会)によっています。

- (1) 固定資産の減価償却の方法  
有形固定資産は、法人税法の規定に基づいて定額法で償却をしています。
- (2) 棚卸資産の評価の方法  
棚卸資産は、最終仕入原価法で評価をしています。
- (3) 消費税等の会計処理  
消費税等の会計処理は、税込経理方式によっています。

2. 事業費の内訳

科目	①地域開発及び地域自立支援に係る事業	②人材育成及び研修生受入に係る事業	③調査・研究に係る事業	④国際理解の推進と啓蒙に係る事業	⑤地域活動の推進に係る事業	⑥その他本法人の目的を達成するために必要な事業	合計
(1) 人件費							
給与手当	15,409,075	2,887,481	590,142	969,519	7,774,844	0	28,631,061
法定福利費	2,791,880	513,057	102,611	175,294	692,626	0	4,275,468
人件費計	19,200,955	3,400,538	692,753	1,144,813	8,467,470	0	32,906,529
(2) その他経費							
期首棚卸高	0	918,790	0	0	0	0	918,790
減価償却	665,368	1,702,632	251,752	17,855	70,548	0	2,708,155
通信費	325,295	182,355	11,500	22,586	78,124	0	619,860
消耗品費	744,541	43,679	8,021	42,411	55,333	0	892,985
旅費交通費	3,929,382	1,786,588	2,020,900	182,783	467,940	0	8,383,593
印刷製本費	368,713	87,946	13,551	23,150	91,472	0	584,832
賃借料	513,344	141,694	18,887	32,231	162,353	0	868,489
海外事業費	16,962,563	0	200,000	0	0	0	17,162,563
海外事業共通費	4,454,000	0	0	0	0	0	4,454,000
研修費	159,738	404,355	5,871	10,030	70,629	0	650,623
支払手数料	365,986	249,794	29,382	9,999	57,490	0	713,651
保険料	674,634	13,798	346	590	2,333	0	691,701
租税公課	720,181	134,342	26,468	45,217	178,661	0	1,104,849
水道光熱費	60,854	11,177	2,235	3,819	24,013	0	102,068
広報費	18,905	3,474	595	1,187	4,690	0	28,951
語会費	46,167	3,488	1,697	2,899	11,453	0	70,701
新聞図書費	33,919	5,230	1,247	2,130	8,415	0	51,941
福利厚生費	44,438	8,167	1,633	2,790	11,024	0	68,052
会議費	29,898	21,045	1,099	1,877	7,417	0	61,336
雑費	70	12	3	4	17	0	106
賃借料	249,227	37,292	7,458	12,741	50,342	0	357,060
支払利息	825	97	19	33	130	0	804
寄付金支出	11,542	2,122	424	725	2,864	0	17,677
減価償却費	23,700	4,354	871	1,488	5,880	0	36,293
期末棚卸高	0	△654,690	0	0	0	0	△654,690
その他経費計	30,399,940	5,112,738	2,604,039	416,545	1,361,128	0	39,894,390
合計	49,600,895	8,513,276	3,296,792	1,561,358	9,828,598	0	72,800,919

3. 固定資産の増減内訳

固定資産の増減は以下の通りです。

科目	期首取得価額	売却	減価	期末取得価額	減価償却累計額	期末帳簿価額
有形固定資産						
什器備品	889,225	0	0	889,225	△713,787	175,438
合計	889,225	0	0	889,225	△713,787	175,438